

第 39 回安田女子大学・安田女子短期大学エッセイコンクール

学長賞 課題部門：「最大の二律背反」

現代ビジネス学科 1 年 2 組 長岡英生

わたしは、猫を飼っています。名前はうた、女の子です。初めて会った 2023 年 5 月 27 日、雲の少ない天気がいい日でした。その 2 週間前に、里親募集のチラシを見て一目惚れしました。倉庫で子猫が見つかって飼える人はいないか、というチラシの写真を見た瞬間に運命を感じました。今まで見てきたどんな猫よりかわいい。わたしは家族と相談し、「猫にかかる費用を自己負担すること。絶対に不幸にしないこと。」を条件に家族に迎え入れることになりました。そこからの行動は早く、ケージや爪とぎ、食器や給水機、キャットタワーやベッドなど必要なものをそろえました。チラシの電話番号に電話をかけ、5 月 27 日に引き渡すと決まると、動物病院の予約もして準備万端でした。あと〇日、あと△日と毎日数え続け、ワクワクとドキドキで、どこか遠くに飛んでいきそうな毎日でした。いよいよ引き渡しの日になり、用意していたキャリーバッグを持って集合場所に向かいました。相手方に空のキャリーバッグを渡し、引き渡されるのを待っていました。待っている時間はそこまで長くないはずなのに、とても長く感じました。相手方から渡されたキャリーバックはほんの少し重くなっていて、軽くてもとても重たい命を感じました。とっても小さいのにちゃんと動いていて、儚いながらも生命力を感じました。写真を見ては「かわいい！かわいい！」と言っていたのに、いざ対面すると、かわいいのに、言葉が出ない。ふわふわしていて雪の結晶のように溶けてしまいそうで、不思議な感覚でした。ただ、何よりも大切に、守らなければいけない存在ができたことを実感しました。動物病院の待合室では、キャリーバッグを私の膝の上にのせて待っていました。膝には人間よりも少し暖かいぬくもりを感じました。それと同時にいつか終わりがあることも考え、悲しさを感じました。生命にはいつか終わりがあることはもちろん知っています。家族との相談でも一番よく話し合いました。話し合ったうえで家族に迎えているのに、その小さなぬくもりの前では受け入れたくない気持ちが強くなってしまいます。「永遠に一緒にいたい」のに、「いつかは別れが来る。」この二律背反は誰もが経験することだと思います。それが人間であっても、人間以外であっても。すべての二律背反の中で一番重く、だれにも変えることができない。これこそが最大の二律背反だと思います。この矛盾が、私たちの感情を動かし、深い思索へと誘っています。この二律背反は人間関係においても存在しま

す。家族、友人、恋人など。共に過ごす過程できずなが深まり、その存在がかけがえのないものになっていきます。しかし、どれほど深い絆で結ばれていても、別れはいつか必ず訪れます。別れるというのは、遠くへ引っ越してしまうなどの物理的距離によるものであるかもしれない。心のすれ違いによる離別かもしれない。あるいは死別かもしれない。この「永遠に一緒にいたい」という気持ちと、「いつか別れる」という二律背反は、私たちに痛みを与え、その痛みに躊躇し、関係を持つことを拒むこともあります。しかし、この二律背反を悲劇的にとらえるのではなく、大切にすべきだと思います。限りある命だからこそ、その時間は尊く、素晴らしいものなのではないでしょうか。永遠の命であれば、私たちは時間を無駄にし、お互いの存在を当たり前だ感じてしまいます。終わりがあからこそ、生きている今の一瞬を大切にし、愛する存在との時間を慈しむのです。1秒が60回重なって1分になる。1分が60回重なって1時間になる。1時間が24回重なって1日になる。1日の積み重なりで「生きる」になる。「生きる」の長さはそれぞれだと思います。一般的に、猫は人間より生きることができる時間は短いです。その時間が終わりを迎える時、残されるわたしは、過ごしてきたかけがえのない時間と喜び、愛は残ります。記憶の中で生き続け、わたしに影響を与え続けると思います。この二律背反を受け入れるということは、諦めるということではありません。限りのある命の中で、どれだけ深く愛し、豊かに過ごせるかという試練だと思います。別れがあるからこそ、出会いを大切に感じ、悲しみを知るからこそ、喜びはより幸せに感じます。わたしとうたとの日々は、この二律背反の中で織りなすかけがえのない物語です。うたが与えてくれる喜びを全身で受け止め、できる限りの愛を与えることで、いつか別れが訪れても、その悲しみは共に過ごした時間の証になります。この二律背反は、わたしたちに「今を生きる」ことの重要性を教えてくれます。愛する存在と共に過ごしている「今」という時間は有限です。いつ終わるかなんて誰にもわかりません。共に過ごせる時間を最大限に慈しみ、感謝することで、より豊かな生を過ごせるのではないかと思います。